

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 国語 第117号

—高等学校対象—

平成22年4月発行

### 思考力・判断力・表現力を育成する高等学校国語科の学習指導の在り方 —言語活動の充実の視点から—

#### 1 学習指導要領国語科の改訂の要点

平成21年に公示された高等学校学習指導要領（以下新学習指導要領と記す）では、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視し、改善の重点として言語活動の充実を図ることが示された。

教科の目標は次のように立てられている。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

この目標には新たに「想像力の育成」が示された。これは、小中学校における指導を踏まえるとともに、高等学校における想像力には、根拠に基づき先を見通すなど、論理的側面もあることを明示したものである。

また、国語科においては、共通性と多様性への対応や言語文化の尊重をキーワードに科目編成が見直された。特に共通性の確保という観点から現行では選択

必修科目であった「国語総合」を共通必修科目とした。

そして、我が国の伝統と文化に関する教育を充実するために、「現代文 A」を新設するとともに、古典に関する指導の充実を図り、科目が改善されている。

そこで本稿では、新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた国語科学習指導の在り方について、思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の充実の視点から述べる。

#### 2 思考力・判断力・表現力の育成と言語活動の充実

新学習指導要領の総則第5款5「教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項」では、「生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から(中略)生徒の言語活動を充実すること」が示された。思考力・判断力・表現力を育成するために必要な学習活動として、言語活動の充実を図ることが求められているのである。

国語科においては、実践的な指導が充実するよう具体的な言語活動が現行学習

指導要領から例示されている。新学習指導要領では、言語活動例が教科の内容(2)に示されている。これは(1)に示された指導事項を(2)に示された言語活動例を通して指導することを一層明確にしたものである。

また、例示されている数も、現行の24例から新学習指導要領では29例と増加し、記述も具体化していることから、言語活動の充実を図る方向性が明確化している。

### 3 言語活動の充実の視点

現在の高等学校国語科指導においては、「多様な言語活動を通して指導するという意識が希薄である<sup>\*1</sup>」という指摘もある。高等学校国語科指導の改善として、言語活動の充実を図ることは、生徒の思考力・判断力・表現力をはぐくむとともに、生徒主体の学習活動を展開するためにも大切である。

言語活動の充実を図る視点として、次の3点が考えられる。

#### (1) 身に付けさせたい能力の明確化

言語活動を行うこと自体が目的化してしまうと「活動あって学びなし」という状況になりかねない。

まず身に付けさせたい国語の能力を明らかにした上で、それに適する学習活動として、言語活動を取り入れた授業を構想していくことが大切である。

国語科の3領域を相互に関連付け、話したり書いたりするなどの、表現活動を展開していくことで、身に付けた

知識・技能を活用することができる、国語の力となるのである。

#### (2) 効果的な言語活動の具体化

言語活動というと表現活動に偏ってとらえられるきらいがあり、課題探究や発表活動ばかり行っている、十分な授業時間が確保されないということも考えられる。理解のために行う言語活動もある。言語活動例はあくまでも例示されたものであり、学校、生徒の実態に応じて、表現と理解の能力を調和的に育成する適切な言語活動を具体化することが求められる。

高等学校における言語活動は、中学校までの系統性を踏まえた上で指導のねらいを明確化し、発達の段階に応じた活動として工夫することが大切である。

#### (3) 言語活動の指導計画への位置付け

言語活動の充実は、すべての科目等で図られるべきことが示されている。だから各科目等での連携を図らなければ、同様の活動が繰り返されたり活動のねらいが不明確になったりして、効果的な学習活動となり得ない。

また、国語科は他の教科・科目の言語活動の充実に資する国語の能力を身に付けさせるという役割を担う。国語科のシラバスや年間指導計画を作成する際に言語活動を適切に位置付け、相互に参照することが、科目間の連携を図り、組織的・意図的・計画的に言語活動の充実を図ることにつながるのである。

#### 4 言語活動の充実を図った実践例

##### (1) 古典における言語活動の工夫

新学習指導要領の言語活動例に、古典を現代の物語に書き換える活動が示されている。そこで、学校では「更級日記」の学習を基にして、主人公の様子を現代文の日記にリライトしたり、漢文の「雑説」の論を踏まえて小論文を書いたりという試みがなされている。

生徒が主体的に表現する場を設定することで、学習意欲の高まりが見られたことが報告されている。

##### (2) 言語活動を意図的に組み込んだ単元構想

ここでは、「読むこと」で身に付けた知識や技能を活用する場面として、言語活動を組み込んだ、第1学年「国語総合」の単元の指導計画例と1時間の展開例を示す。

【言語活動を意図的に組み込んだ実践例】 県立松陽高等学校 矢野 梨佳教諭の実践を基に作成

- 1 科目（対象学年） 国語総合（第1学年）
- 2 単元名 評論（二）
- 3 教材名 「『しきり』の文化論」（柏木 博 著）
- 4 指導のねらいと言語活動の工夫（下線部は具体的な言語活動）
  - (1) 文章の論理に即して自らの経験や考えを表現する活動を通して、本文の要旨を的確に理解するとともに、筆者の主張に対する自分の考えをもつ。（読むことイ、言語活動例ウ）
  - (2) スピーチを通して意見交流の場面を設定することで、社会生活における、ものの見方や考え方を豊かなものにする。（読むことオ、言語活動例ウ）

時間	学習内容	指導上の留意点（※言語活動の工夫）
1	○ 学習課題 <div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">筆者の主張に対する自分の考えをまとめてスピーチをしよう。</div> ○ 文章中における「しきり」がどのような意味で使われているのかを理解する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習の見通しをもたせる。</li> <li>・ 単元の終末の言語活動を認識させることで、読むことの必然性をもたせる。</li> </ul>
2 3 5	○ 意味段落ごとの内容を理解する。 ○ 論理展開について理解する。 ○ 意味段落ごとの読み取りを行い、要旨をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 筆者の論拠を、自分の知識や体験と対照させる。</li> <li>※ 理解の段階でも、要旨を書いてまとめたり、論理構成を文章構成図にしたりするなど、活動を工夫する。</li> </ul>
6	○ 筆者の論理展開を踏まえ、自分の大切にしている「もの」が「わたし」の生活や人生で担っている役割を具体的に考えて書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 筆者の主張する内容を自分自身の経験等に関連付けながらとらえ直させる。</li> <li>※ 筆者の主張を自分の体験と関連付けて検証・論述する活動を通して、理解を深める。</li> </ul>
7	○ ワークシートをもとに、お互いにスピーチを行い、筆者の主張をよりの確に理解する。さらに、理解したことを踏まえ筆者の主張に対する自分なりの意見をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 意見交流を行い、筆者の主張をよりの確に読み取る。</li> <li>※ スピーチを通して、相互の意見交流を活発なものにし、相互評価等を行うことで、ものの見方、考え方を豊かなものにする。</li> </ul>

(3) 授業の実際 (7 / 7)

【本時の目標】 意見交流を基にして筆者の主張を的確に理解し、自分なりの意見をもつことができる。		
	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	1 学習目標を知り、学習の見通しをもつ。 ・ 学習活動の流れの確認	○ 本時の学習について生徒たちに見通しをもたせる。 ・ スピーチを通して、筆者の主張を適切に理解するという目標を明確化する
展 開	2 グループに分かれ、書いた文章をもとにスピーチを行う。 ・ 前時のワークシートをスピーチのメモ原稿として活用する。 3 互いのスピーチについて感想や気付いた点等を話し合う。 ・ ワークシートや付せんのコメントを基に、筆者の主張に対する自分の考えが明確になったか確認する。 4 筆者の主張に対する自分の意見を書いてまとめる。 ・ 「肯定」、「否定」のいずれかの立場で書く。 5 クラス全体で意見の交流を行い、それぞれの読みの深まりを確認する。	○ 互いのスピーチについての感想や気付いた点等を付箋紙に書かせ、意見を交流させるすることで、自分の考えの妥当性について確認させる。 ○ 筆者の主張内容を再度確認し、自分や友人のスピーチ内容との整合性を確認するよう指導する。 ○ 筆者の論理展開に即した形で意見を書かせる。 ○ 自分のことと関連付けながら書いたり読んだりするという活動を通して文章の読みが深まったことを確認させる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <b>【評価規準】</b>                      互いの意見交流を通して、筆者の主張を自分や他の生徒の考えと照らし合わせ、的確に読み取っている。                      (スピーチ, ワークシート)                 </div>
終 末	6 本時の活動を振り返り、自己評価を行う。	○ 今後の学習活動に対する課題意識や意欲をもたせる。 ・ 自己評価カードの活用 ・ 評論文を批判的に読むことの意義を理解させる。

高等学校における言語活動の充実は、生徒主体の学習活動への指導の転換に資するものである。生徒の思考力・判断力・表現力を高めるとともに、学ぶ意欲の向上を図るためにも、意図的・計画的に言語活動を組み込むことで、生徒が主体的に思考・判断し、表現する場となるよう授業改善を進めていくことが必要である。

中学校との指導内容の系統を踏まえた上で、各科目で身に付けさせるべき知識・技能を明

確化し、多様な言語活動を展開することが、新学習指導要領の改訂の趣旨を実現することにつながると考える。

\*1 文部科学省「中等教育資料」平成21年9月号

【参考文献】

・ 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編」平成21年12月

(教科教育研修課)